

■テーマ展

らん でん かねざわ
佐々木藍田——金沢金山の絵師

会期 平成15年3月14日(火)～5月5日(日)

平成13年2月に大槌町教育委員会主催の「絵師佐々木藍田の足跡」展が開催されました。生年は不明ですが慶応元（1865）年に没した佐々木藍田は、現在の山田町や大槌町金沢で染物業を営むかたわら多くの絵を描いた人物です。その代表作である「金沢御山大盛之図」は、江戸時代の金沢金山の様子を伝え全国的にも貴重な鉱山資料として知られています。しかし藍田の他の作品は地元でも知る人が少なく、大槌町での展示会は地域の文化を掘り起こす意味でも有意義なものでした。

今回の当館での展示は、江戸はもとより盛岡からも遠く離れた地方絵師がどのように絵を学んだのか、ご子孫の所蔵する藍田の残した画稿（下絵類）を中心に紹介し、絵図や生業であった染物業に用いた型紙などの展示を通して江戸時代の地方文化について考えてみます。

1 藍田の画稿

藍田の子孫である大槌町金沢の佐々木亮平氏宅には500点を超える画稿が残されています。内容は高名な画家の作品や刊行されている絵手本の模写、自然の風景や動植物、魚類の写生などです。

江戸時代の絵師の多くは、自ら師と仰いだ画人の作品を真似ることが画業の中心と

なります。「狩野派の絵師」「円山派の絵師」などというグループ分けがなされるのはこのためです。しかし、残された藍田の画稿は、幕府や諸大名の御用絵師である狩野派や、学者や趣味人の描いた軽妙な文人画、庶民の生活を描いた浮世絵と多岐にわたる模写を残しています。全国に知られた画家の作品では円山応挙、谷文晁、大西椿年など、盛岡藩内では八重豊盛沢、本堂蘭室、川口月嶺などがあり、署名や印まで模写したのもみられます。地方在住で出版物を入手することが困難であったためか、葛飾北斎や土佐光芳などの出版された絵手本を模写したのも多く残されています。

写真1の「鹿の図」は、江戸の画家・鈴木南嶺（なんれい）の作品を模写したものです。南嶺は写生を重んじた円山応挙（まるとうきよ）の流れをくみ、江戸後期の盛岡藩でも川口月嶺（げつれい）がその弟子として知られています。藍田は模写した南嶺の作品に自ら写生した鹿の角を別紙に描いて何枚も貼り付けています。単なる模倣に終わらず、オリジナリティを追求した藍田の姿勢がうかがえる資料です。

多くの作品を模写した藍田ですが、本物をどこで見たのでしょうか。藍田は、天保15（1844）年に伊勢神宮参詣の旅に出て、往路福井の永平寺や京都の社寺を参

詣しながら風景や人々の様子をスケッチした道中記を残しています。残念ながら復路の記録はないのですが、現在の静岡県清水の様子を描いた絵図があり、東海道を帰ったと考えられます。画稿のなかには京都の寺院で模写したと記されたものもあり、伊勢参詣の旅は絵の材料を収集するものでもあったようです。

また、江戸時代の岩手県沿岸部は江戸や大阪へ海産物を送る窓口でした。同時に江戸や大阪の文化が流入した地域でした。商人が入手した絵画を求めて、藍田は近郷の町や村を訪ねたものと考えられます。

2 絵図を描く

江戸時代の幕府や大名の御用絵師は、城や屋敷内の装飾のために絵を描くばかりではなく、所領支配のための絵図を描きました。測量に基づく地図と異なり、何を目的とするものなのかにより描かれた地形は変わります。現代でも、列車時刻表に掲載される地図が地形の正確な描写よりも駅や拠点都市の配置などに焦点が当てられているのと同じです。実測に基づかない江戸時代の地図は、視覚的・心理的印象が色濃く反映し、デフォルメされた絵画的地図であったことから絵図と呼ばれます。

藍田の画業が地域で知られるようになる



写真1「鹿の図」

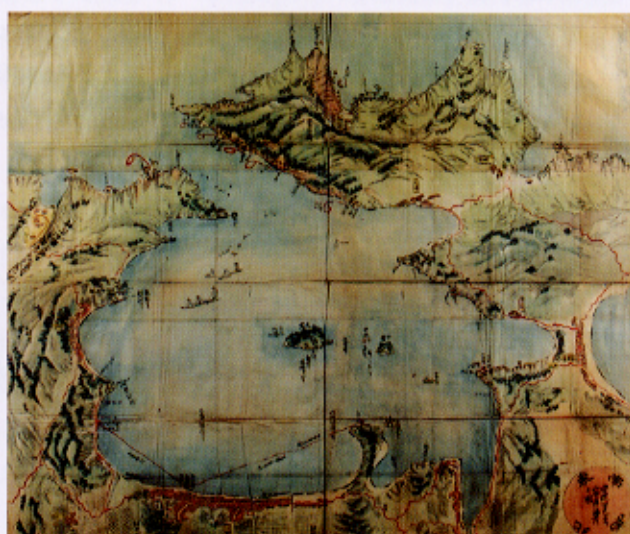


写真2「山田浦海岸之図」

と、代官所から絵図の作成が依頼されるようになったようです。釜石から野田にかけての海岸絵図の作成も命ぜられています。絵図作成にあたっては藍田は先人から学ぶことを怠りません。盛岡藩士で蝦夷地警備に参加したと推測される人物が松前から持ち帰った間宮林蔵の蝦夷地図や、江戸から現在の宮城県金華山までの海岸を描いた絵図などを模写しています。

写真2の「山田浦海岸之図」は、安政4(1857)年のものです。異国船来航の頻繁な幕末期に、港湾守備の必要から代官所の命で藍田が描いたもの下絵と考えられます。オランダ島と呼ばれる大島や山田中心街の南部に伸びる伝作鼻とよばれる小半島が、実際よりも大きく描かれています。湾北部の大沢集落の沖にはたくさんの帆船が描かれ、山田湾の賑わいを表現しています。

このような絵図の作成により代官所から絵筆の実力を評価された藍田は、幕府の役人が金山調査に訪れた際に「金沢御山大盛之図」を描くよう依頼されたのでしょう。

3 「金沢御山大盛之図」の製作時期

わが国鉱山史上に重要な位置を占めるこの資料をいつ、どのような目的で藍田が描いたのでしょうか。

盛岡藩の家老席日誌「雑書」によれば、天保9(1838)年11月23日に江戸の盛岡藩邸を出発した飛脚が、老中水野忠邦の命による幕府の金山調査実施を伝えてきました。幕府の調査責任者は「渡辺角太夫」と記されています。12月2日に盛岡にこの知

らせが到着すると、あわただしく金沢金山へも藩の役人が派遣され始めます。盛岡藩では幕府役人の実地調査の対応責任者に勘定奉行の田鍬六兵衛を任命しますが、現地金沢への出発は天保10年2月9日です。このことから渡辺角太夫ら幕府の役人の来山が2月中旬と考えられます。表紙に写真を掲載した藍田の「大盛之図」の巻末には、宛名が記されますが、その筆頭に「渡辺角太夫」の名があり、この作品を藍田が天保10年に幕府の金山調査役人に見せるために描いたことを知ることができます。

幕府の金沢金山調査については今後さらに調査を継続し、発表の機会を持ちたいと考えています。

4 藍田の型紙

藍田は本名を佐々木政吉といい、荒川屋の屋号を用い山田で染物師をしています。金沢に移った時期は不明ですが嘉永7(1854)年の証文がヒントになりそうです。金沢で染物業を営んでいた人物が藤屋という商人から10両ほどの借金をしますが、現金で返済できないので担保として「山田町政吉」すなわち藍田に預けていた染物道具と金沢での染物営業権を譲るという内容です。証文は保持する人が利益を証明するために保管します。藍田の子孫が保管したということは、この証文の結果、藍田が金沢での染物営業権を入手したと考えられます。佐々木家の古文書では、万延元(1860)年には金沢に居住したことが記されており、嘉永7年以後の6年の間に山田

から金沢に移り染物業を営むようになったといえます。

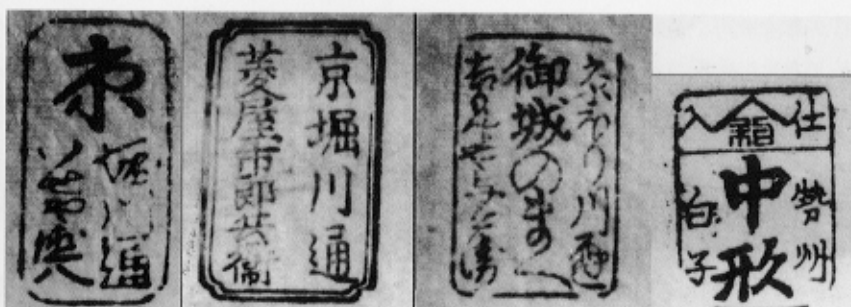
藍田の子孫である佐々木家には現在550枚の衣服を染める型紙が残されています。和紙に柿渋を塗り防水加工しているため、全面が黒っぽい茶色ですが、赤外線テレビで確認すると商印や文字があることがわかります。印または文字がある型紙は416枚(76%)におよび、商印がある型紙295枚のうち180枚(61%)のものに京都の商人の印が捺されています。県内ははじめ東北地方に残される型紙の多くは、会津または伊勢のものが多いようです。画稿のところを考察したように、藍田は海を窓口に関東との交流を持っていたことが型紙からも伺われます。型紙の文様は、武士の袴に見られる小さな幾何学的文様を連続させる小紋や婦人の晴着にも見られるような大きな菊を配した文様など、多様な型紙が残されています。代官所の置かれた大畑ではなく、山田や小さな集落である金沢に需要があったとは考えにくい内容です。金沢金山の隆盛が染物需要を高めたことも想像できるでしょう。

「地方の時代」「地域文化の創造」がさげられて久しいですが、江戸や京都の流行を積極的に取り入れつつ、独自のものへ発展させようとした藍田の画業。今回のテーマ展から、江戸時代の地方文化を感じ取っていただければと思います。

(学芸調査員 時田里志)



型紙



赤外線テレビに映し出された型紙の商印